

ローマ人への手紙第五回質問

3..21 しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。

3..22 すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。

(ロマ三章二一―二二節／新改訳2017)

(問一) 21、22節の「神の義」とは、神の性質に関するものではありません。これは、「神が人にご自身に対して正しい立場を与える道」(ウイリアム訳)、「神がご自身に対して人を正しい者にする道」です。異邦人とユダヤ人の義について、パウロはすでに明らかにしてきました。このことによって、読者に対してどのように、神の義の道を考える準備をさせてきましたか。22節後半、23節も参照。

(問二) 21―26節で、この救いの道、つまり、神の義の道について、はつきりと示してある点をできるだけ多く見つけて、予習の時に書きとめておきましょう。

(問三) この救いの条件はなんですか。これは、だれに適用されますか。なぜですか。

〔注〕「義と認める」とは、正しい者とみなす、正しい者と申し渡すことです。「贖い」とは、身代金を支払うことによって得られる解放、または、救い出されることを意味しています。「なだめの供え物」「罪の贖い」とは、怒っている神を罪ある人間がなだめることではありません。罪ある人間に対する神の律法の要求が、神ご自身の御子の死によって、完全に満たされることです。

グループ聖書研究(聖書を読む会の手引より)



救いの道

(ロマ三章二一―二二節)

わたしたちは、罪によって、そのあらゆる機能が腐敗墮落してしまっているため、どんなに努力しても、律法を完全に行なうことはできません。ただ神の怒りがその上に臨むだけです。ですから、律法を守ることによって、神の義が成り立つという仕方です。わたしたちはもはや神に受け入れられる義を満たすことはできなくなりました。そこで、神は、それとは別の方法で神の義が成り立つ道を用意されました。それが今やはっきり現わされたのです。「しかし、今は、神の義が、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、現わされた。」ここで、「現わされた」と言われていることは、この時に、用意されたのではなく、すでに用意されていたものが、この時に現わされたのです。

これは、救いの道です。わたしたち人類の救いの道は、永遠の昔に、神が用意してくださいました。それだけではなく、

旧約時代においても、そのことが語られていました。ですから、ここでも「律法と預言者によってあかしされて、現わされた」と言われています。この救いの道は、永遠の昔に、神が用意してくださり、旧約聖書によってあかしされ、今やこの時代に明らかにされたのです。

このような言い方は、救いの道が、旧約時代にも新約時代にも、ただ一つであったのだということを表わしております。旧約時代は、律法を守ることによって救われ、新約時代は、キリストの福音を信じることによって救われるわけではありません。旧約時代、新約時代を通して、救いの道は一つしかありません。旧約時代、新約時代を通して、救いの道は一つしかありません。「それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であつて、信じる人には、だれにでも与えられるものなのである」と言われているとおりです。

「今は、神の義が、律法とは別に、……現わされた」と言われていることは、旧約時代には、律法を守ることによって救われるということがあつたと言っているではありません。人類が罪に陥る以前は、確かに律法を守ることによって神の義に達することができました。しかし、罪に陥って以後、だれひとりとして、律法を完全に守ることのできる人はいなくなつてしまつたのですから、そうすることによって神の義に達することはできなくなつてしまいました。ですから、「律法と預言者によつてあかしされて」と言われているわけです。「律法と預言者」とは、旧約聖書のことです、ユダヤ人はそのように呼びました。

ここで注意しなければならないことは、「救いの道」と言

ってもいいところを、「神の義」と言っていることです。「神の義」については、一章一七節を学んだとき、これが旧新約聖書全体の重大なテーマであると申しました。「神の義」というテーマは、重大ですが、それだけに、これ一つを学ぶとしても、相当ぼう大なものになってしまいます。そこで、ここでは「神の義」そのものについて学ぶよりも、「救いの道」と言うべきところに、「神の義」ということばが出て来ることについて、考えてみたいと思います。「神の義」という事柄について注目しますと、実は一章一七節から、この三章二一節につながるということがわかります。一章一七節でも、「神の義」と言わないで、「救いの道」と言っても、十分意味が通じるところを、「神の義」と言っていることに意味があると申しました。わたしたちは、「救い」と言うと、すぐ「神の救いの恵み」というように「恵み」を連想しがちです。神の恵みによって救われるわけですから、当然と言えば当然なのですが、しかし、聖書は、「恵み」の前に「義」を持ち出します。これが重要なことなのです。なぜ重要なのかと言いますと、聖書がそう言っているから重要なのです。この救いの道、つまり福音の本義について述べている三章二一―三一節のところでも、繰り返し「義」が出て来ます。キリスト教の核心である福音というのは、実にこの「義」の上に成り立っているものであることを覚えなければなりません。この点が、今日、案外ないがしろにされている点ではないかと思えます。そのため、安っぽい福音に変質させられてしまっているのではないかと恐れます。しかしながら、あくまでも

「神の義」を根底にした救いであることに留意しなければなりません。「神の義」が犯された以上、この原状回復は、神の義が満たされること以外にはないわけで、そこにキリストの贖いが重要な意味をもってくるようになります。

ところで、救いの道についてしるしているこの個所は、大きく二つに分けることができ、それをさらに細分すると次のようになります。

一 救いの道（三・二一—二四）

- (一) 神が義を用意され、それが今現われたということ、救いは徹頭徹尾、神のものである（三・二一）。
- (二) この義がわたしたちのものになったのは、わたしたちが律法を守った結果ではなく、信仰によって受け入れたことによる（三・二二）。
- (三) その義は、差別なく、信じる人だれにでも与えられる（三・二三—二四）。
- (四) それは、神の恵みによる—救いの性格（三・二四）。
- (五) それは、キリストの贖いによる—救いの土台（三・二四）。

二 救いの特徴（三・二五—三一）

- (一) 救いの道は、神のご性格に深く関係している（三・二五—二六）。
- (二) 救いの道は、神のご栄光のためであって、決して人間の榮譽のためではない（三・二七—二八）。
- (三) 神は全世界の神であられ、救いの道は全世界の人々に向かつて開かれている（三・二九—三〇）。

(四) この救いの道は、律法を確立するものである(三・三一)。

このように見る事ができるわけですが、きょうはこのうち一の(一)と(二)、つまり二一—二二節のところを学びたいと思います。すでに述べてきましたように、救いは神の義が土台となっているものです。「神の義」と言われているように、神が中心なのです。神の義が犯された以上、この神の義の回復なしに救いはありません。ですから、人間がこの救いを作り出すことなどできないのです。救いは、あくまでも神によるのでなければなりませんし、神が事実、用意してくださいました。神がすべてイニシアティブをとってくださいます。旧新約聖書を通して、わたしたちは、そのことについて、つぶさに知ることができます。

救いの道が旧約聖書の中にあかしされると、ここで言われていることは、旧約聖書の中に、その事実を見ることができません。まず創世記を見てみましょう。すると、そこには、三章一五節で、女の子孫から生まれる救い主が、蛇によって表わされている悪魔の頭を打ち砕くという約束がしるされています。そこから始まり、アブラハムに対して、その子孫から救い主が現われるという約束⁽²⁾や、出エジプト記⁽³⁾にしるされているイスラエル民族の救出における過越の小羊⁽³⁾が表わしている救い主イエス・キリストや、レビ記における犠牲の動物が表わしている救い主イエス・キリストの犠牲の贖い、さらには、詩篇に預言されている救い主⁽⁴⁾、とくに二二篇には、救い主の十字架上の死がしるされていますし、イザヤ書にしる

されている救い主の預言⁽⁵⁾を始めとして、エレミヤ書⁽⁶⁾、ダニエル書⁽⁷⁾、ミカ書⁽⁸⁾、ゼカリヤ書などの預言書にしるされているところを見るならば、旧約聖書の中には、救いの道について、実に多くの証言がなされていることがわかります。

主イエス・キリストご自身、復活されたあと、弟子たちに、次のように語っておられることによってもわかります。「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就する。」⁽⁹⁾このことは、アウグステイヌスが、「旧約は新約の中に現わされ、新約は旧約の中に隠されている」と言っていることでもあります。旧約と新約は全然別物なのではなく、相互に密接に結びついています。旧新約聖書は、ただ一つの救いについて、つまり、イエス・キリストの福音についてしるしているのです。それは、イエス・キリストがわたしたちの罪を十字架上で贖ってくださいったことに基づく福音です。

ですから、このイエス・キリストを信じる人は、だれでも、神が受け入れてくださるのであり、イエス・キリストが、神の義を満たしてくださいださったことによつて、神は満足されたわけです。わたしたちは、神の義を満たすことができない者たちになつてしまつていますから、イエス・キリストが満たしてくださいださった義を受け入れること以外に、神のよしとされる道はありません。神は、このようにして、道徳的無能力者になつてしまつたわたしたちに、救いの道を用意してくださいださつたのです。あとは、それを感謝し、信仰によつて受け入れるだけです。信仰によつて受け入れる人は、たといだれであつ

でも救っていたことができず。ここに神の用意してくださった救いの道があるのです。

注(1)旧約聖書のことを、ユダヤ人は「律法と預言者と諸書」(トラー・ナビーム・ヴカトビーム)と呼びました。これは少し長いので、これを略して、「律法と預言者」とか、さらに略して「律法」とだけ呼ぶこともありました。

- (2)創世記二二章一七節。
- (3)出エジプト記一二章三一一四節。
- (4)メシヤ預言の詩篇と呼ばれます。
- (5)イザヤ書七章一四節、九章六一七節、一一章一一五節、四〇章一一二節、五三章。
- (6)エレミヤ書二三章五―六節。
- (7)ダニエル書九章二三―二七節。
- (8)ミカ書五章二節。
- (9)ルカによる福音書二四章四四節。

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解(ロイドジョンズ・ローマ書講解要約)より

